

日露戦争百年に因む戦史

黒溝台会戦と三人の指揮官

— 満洲の野戦で一番危なかった一場面 —

田中 賢一 52期

黒溝台会戦の概要

黒溝台会戦は、日露戦争中、敵が攻勢を採った唯一の会戦である。日露戦争における陸上戦闘は明治37年5月1日鴨緑江の戦闘をもって開始され、11月下旬沙河の対陣に至る間、旅順は別として満洲の野において大小10の会戦(戦闘)が行なわれた。鴨緑江の戦闘、南山付近の戦闘、得利寺付近の戦闘、摩天嶺の戦闘、橋頭付近の戦闘、大石橋付近の戦闘、様子嶺及び楡樹林子付近の戦闘、柞木城付近の戦闘、遼陽会戦、沙河会戦である。以上の会戦(戦闘)は総て我が攻勢をとり、敵は守勢にたつた。兵力的には何れも敵側が優勢で、特に彼我の主力が激突した遼陽付近の会戦においては、私の13万に對し敵は22万を算した。遼陽付近においては、敵將クロバトキンは計画に基づき決戦を企図したのであるが、我が第1軍の積極的な側背進出に眩惑され無為に退却した。遼陽会戦の決がついたのは9月4日であり、我に追撃の余力がなかったため敵に立直りの余裕を与

え、10月中旬沙河会戦が惹起した。沙河会戦は遭遇戦的な野戦であり約1週間続いたのであるが、敵が戦闘を断念し退却したため終末を告げ沙河の対陣となつた。

当時我が軍は、砲彈の不足特に甚しくかつ酷寒の候でもあり、これ以上の北進は不可能なため敵と数百米を隔てて相對峙し越冬することになつた。

一方旅順は8月以來第3軍が5ヶ月の死闘を繰り返し、約6万人の損害を払つて翌年1月1日之を陥落させた。

以上のような戦況であつたため、露国内においてはロマノフ王朝及び軍の威信は日毎に失墜し、1905年1月9日(明治38年)には有名な血の日曜日事件が起き、満洲における頽勢を挽回しないと、ロマノフ朝及び皇帝の軍隊の存在が危ない状態に迫込まれたのである。黒溝台会戦はこのような政治的理由が大きく作用して、開戦以來初の大攻勢が行なわれたのである。

黒溝台会戦の露軍指揮官はグリッペンベルグ大将である。彼は總司令官クロバトキンよりも年長者で、大将昇任

は同時であつた。37年末、満洲に着任し第2軍司令官としてクロバトキンの部下となり心中面白くないものがあつた。従つて彼は、この一戦によつて自己の名聲を博せようと企て、一方クロバトキンは自己の直轄である第1軍を以て沙河正面に牽制攻撃を行なうことなく、戦勢を傍観するという態度に出た。

当時我軍は右から1A(2D、12D、GD)、4A(10D、5D)、2A(3D、6D、4D)を並べ8Dを総予備として控置し、左開放翼には秋山支隊を配置し警戒に任じさせていた。

秋山支隊とは、騎兵第1旅団長、秋山好古少將の指揮する部隊で騎兵第1旅団(騎兵第13、14聯隊)のほか騎兵第3、5、6、8、9、10各聯隊の主力、歩兵第9聯隊の主力、後備歩兵第2聯隊の1大隊、工兵第8大隊の主力等からなる部隊であつた。支隊は40kmにわたる正面を、点在する部落を拠点として陣地を占領していた。

会戦の経過

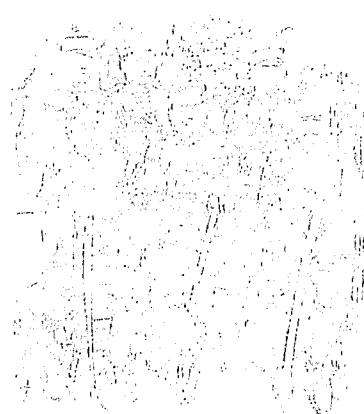
露軍第2軍司令官クリッペンベルグ大将は、西比利車第1軍団、欧露第8、第10軍団及び集成狙撃軍団、合計10個師団余の大軍を率いて1月24日奉天西方地区より行動を起し渾河右岸より長灘方面に進出してきたのである。

翌25日午前3時、秋山支隊主力により出された黒林台の我が前哨は、強大なる敵の攻撃を受け一時小台まで退却するの止むなきに至り、午前10時頃からは富家庄に對する敵軽重砲火の集中物すごく、当面の敵情頗る活気を呈し出したのである。之と同様に韓山台の三倍支隊、沈日堡の豊辺支隊及び黒溝台の種田支隊方面も朝來猛烈なる敵の軽重砲火の集中を受け、雲霞の如き敵の大兵団は逐次秋山支隊の全正面に亘つて殺到し來り、飛雪粉々たる酷寒の曠野に彼我の交戦は漸く激烈を加へたのである。

總司令部では総予備隊として控置してあつた第8師団(師団長、立見尚文中將)にこの敵の撃攘を命じ、秋山支隊を第8師団に配属したのである。同

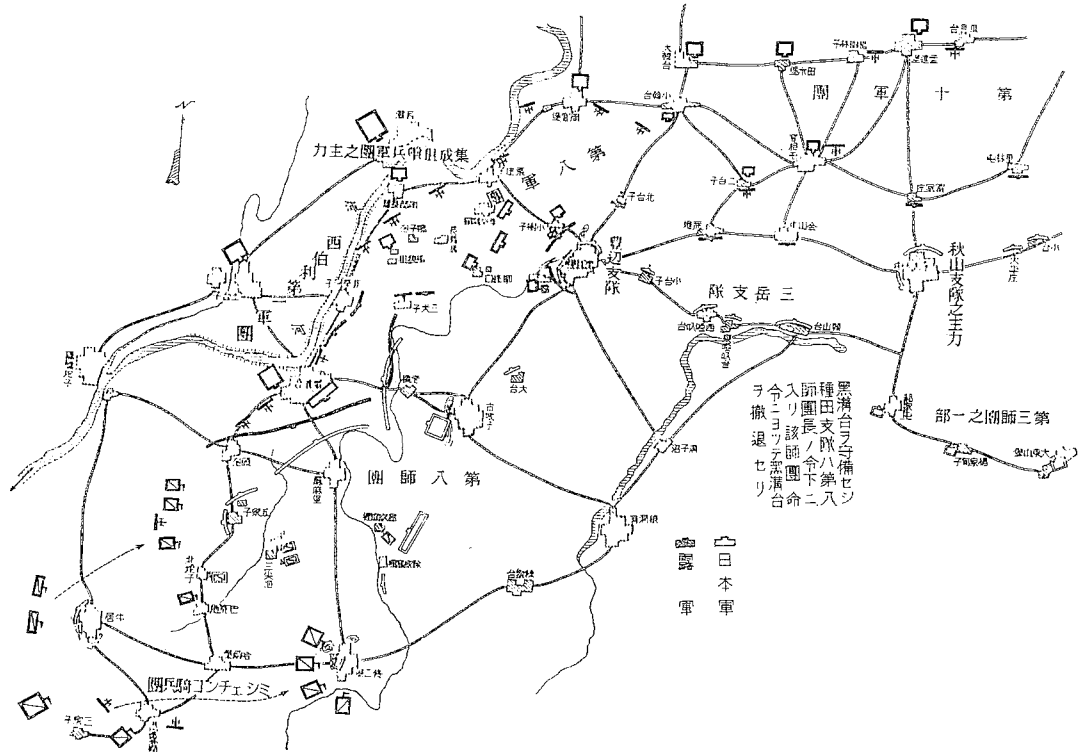
騎兵第1旅団司令部

これだけの陣容で30キロ正面に展開している部隊を指揮した



黒溝台附近之戦闘

1月26日午後6時ノ位置



に沈旦堡を固守すべき命令を下した。
 一方第8師団の進出に伴い黒溝台の
 種田支隊(騎兵第5聯隊及び第8聯隊
 基幹の部隊)は第8師団長の直轄と
 なったが、優勢な敵の攻撃を受け苦戦
 に陥り、その夜8時頃師団命令によつ
 て古城子に退却した。

明くれば26日、朔風凜冽飛雪粉々た
 る中に敵の攻撃は愈々急であつて、各
 方面とも昨日に増す苦戦を続けた。中
 でも沈旦堡方面にあつては、朝米約
 1ヶ師団半の敵の包圍攻撃を受け、戦
 闘惨烈を極め防戦これに努めたが、夕
 刻には南部沈旦堡を敵手に委ね、敵と
 土壁をへたてて戦うに至つた。
 敵の重砲は部落内に集中し火災を起
 したが、豊田大佐は三日間もてばどう
 にかなると言つて動ずる色もなく、歩
 兵3個中隊、騎兵8個中隊、騎砲6門、
 機關砲3門をもつてこれを守り通した。

一方、黒溝台方面の敵撃攘を命ぜら
 れた第8師団は、種田支隊を一旦後退
 させた後、26日朝来先ず主力をもつて
 黒溝台の敵を攻撃したが、敵の兵力は
 刻々増加し逆に包圍される勢になつ
 た。当初我軍は敵兵力を1個旅団乃至
 1個師団と判断し、黒溝台を放棄する
 ことによつて敵を誘致して撃滅しよう
 と企図した。ところが10個師団にも及
 ぶ敵の大攻勢であつたので、満洲軍総
 司令部では更に第5、第3、第2の各師

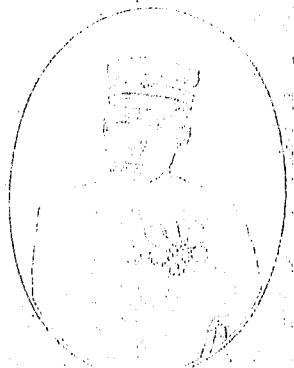
団を第8師団に増援して臨時立見軍を
 編成し、黒溝台方面の急に当らしめた。
 27日は終日悪戦苦闘の連続であつ
 た。沈旦堡は26日夕第3師団の歩兵第
 33聯隊の救援をえて危機を脱したもの
 の、敵の砲撃は依然続き火災は収まら
 ない。黒溝台方面は猛攻を重ねるも奪
 回することができない。翌28日もまた
 雪の中で彼我の死闘が繰り返され、中
 央拠点小台子は逆に敵に奪取され29日
 を迎えた。この朝は特に寒く零下20度、
 敵の砲撃は依然職烈を極めたが、攻勢
 は漸く鈍り夕方頃から各方面とも敵が
 退却を開始した。ここにおいて形勢忽
 ち我に有利になり黒溝台を奪回し、こ
 の会戦の幕を閉じた。

この黒溝台会戦は、日露戦争中最も
 危険な一戦であり、これに破れたなら
 ば満洲軍全線が左翼から崩壊したであ
 る。これを見事に拒止し戦局を有利
 に転回したものは、第8師団及び立見
 將軍の麾下に入った各兵団の奮戦に依
 るのであるが、その立見軍の攻勢の支
 とうとなつた秋山支隊就中沈旦堡を死
 守した豊田支隊の功績に帰さねばなら
 ないと思ふ。

3人の指揮官

秋山少将と豊田大佐

騎兵第4聯隊長、豊田大佐は典型的
 な第一線指揮官型人物であつた。平穩



豊 辺 新 作

無事の際は余り目立たぬ将校であったらしく、大尉でぼつぼつ首だと言われていたとき日清戦争が起き、騎兵中隊長として出征、牙山、成歙の戦闘に目覚しい活躍をして人に認められ、日露戦争前には大佐にまで昇任していた。然しもうこの辺で首だと噂されていたとき日露戦争が起きたのである。戦後中將にまで昇進したが、ある人が豊辺將軍に沈旦堡における指揮について尋ねたところ「ただ苦しいのを我慢しただけです」と答えた。そこで重ねて「閣下は苦しいのを我慢なさったでしょうが、部下をして辛抱させるにはどうしたらよろしいでしょうか」と尋ねると「平素から苦勞を共にするので」と答えただけでそれ以外は何も語らなかつたという。

豊辺大佐は騎兵8個中隊、後備歩兵3個中隊、騎砲6門、機関砲3門をもつて沈旦堡の確保を命ぜられたとき「わしは1個師団以上の敵でなければ退却せぬ。またたとえ1個師団以上の敵であつても三日間は拒止する。三日もてばなんとかなる」と言つたという。ところが沈旦堡を攻撃した敵は1個師団半、しかもその砲兵力は野砲50門、15榴2門であつた。5日間に亘り集中砲火を浴び沈旦堡の部落は形改るまで崩れたのである。

秋山支隊長は旅団の全力を14聯隊長に与えて沈旦堡の固守を命じた時「豊辺はあしよりねばり強い」また「豊辺は北越人じゃ」と言つたという。豊辺聯隊長は新潟県出身である。戦後秋山將軍は「あのとき沈旦堡には一兵も残つていなくなるやうと何度も思つた」と述懐している。

平素愚鈍の評さえあつた豊辺聯隊長を秋山將軍は最も信頼していたものと思ふ。才氣煥発型指揮官では守り通せなかつたかも知れない。

秋山好古將軍も之また典型的な軍隊指揮官であつた。沙河対陣中零下20度に及ぶ酷寒の候、汚い支那家屋の中でアンペラの上にあぐらをかき、螢火のような火鉢に手をかざし、終日地図を眺めていたという。水筒につめた支那酒を茶碗に注いで飲み、地図を見ては40kmに及ぶ正面を僅少な兵力で如何にして掩護すべきか策を練つていた。

此の頃外国觀戰武官が視察に来た。總司令部では余り兵力薄弱な正面は見せないやうにという注意があつたが、將軍は「だつて今更どうなるものか、隠しだつてすりゃなお知れる」という都々逸の文句を引用して、第一線至るところに案内してみせたという。

騎兵第1旅団の衛戍地は習志野だつたので、將軍の留守宅は葉岡台にあつた。或る日、某中尉が斥候から帰り將軍のところへ報告に行くと、將軍は水筒の酒を飲んでいたが茶碗に注いで差出し、葉岡台から送つてよこした味噌漬大根を与えてその勞をねぎらつたという。

秋山支隊長の配備をみると、最も重圧を予想される沈旦堡には、先にも述べた通り自分の個々の部下である騎兵第1旅団を豊辺大佐に指揮させて配置し、その兩翼である韓山台と黒溝台に配属部隊である三岳支隊(騎兵10聯隊基幹)と種田支隊(騎兵5聯隊基幹)をそれぞれ配置している。しかも自らは最右翼の季大人宅に位置し、他から配属された歩兵第9聯隊の1個大隊、騎兵第3及び第6聯隊の主力等をもつてこの拠点を守つた。最右翼に位置したのは軍主力との連絡の便を考へてのことである。勿論この拠点は敵の重圧を受けた。

激戦の最中に總司令部參謀の田村少佐(52期騎兵田村有義君一奈良在住の父)が連絡に来た。秋山支隊長はそのときも、例の通りきたないアンペラの上で背を丸めて地図を眺めていたが、田村參謀が「閣下様子を伺いに参りました。如何でありますか」というと支隊長は「見ての通り無事だ」「これからどうなさいますか」の問に対し「どうもこうもないよ、おれの出来ることはこうして坐つてゐることだけだ」と答えたという。

この激戦の最中に沈旦堡の豊辺聯隊長から伝令が来り、部落内に繋いである馬が砲弾によつて斃れるので、馬だけ後方に退けたいという申出があつた。この際秋山支隊長は「騎兵は馬と一緒に死ぬのだ」と言つて断乎この申出を許可しなかつたさうである。その後手馬位置移動の名目で下げたという。

立見師団が總司令官の命を受け戰場に駆けつけるとき、師団參謀長山比大佐の発案で黒溝台の種田支隊を一旦後退させ、追尾してくる敵を捕提して撃滅しようという計画が建てられ、これに基づき命令が秋山支隊長を経由することなく種田支隊に下達された。これがため種田支隊は25日夜占城子に撤退したのであるが、これについて秋山將軍は戦闘中も戦後も「あのやうなことはないかんだ」と申していたさうである。露軍は退却する支隊に追尾することなく黒溝台を占領し防衛したので、これを奪回するため第8師団は多人の

退却せぬ。またたとえ1個師団以上の敵であつても三日間は拒止する。三日もてばなんとかなる」と言つたという。ところが沈旦堡を攻撃した敵は1個師団半、しかもその砲兵力は野砲50門、15榴2門であつた。5日間に亘り集中砲火を浴び沈旦堡の部落は形改るまで崩れたのである。

秋山支隊長は旅団の全力を14聯隊長に与えて沈旦堡の固守を命じた時「豊辺はあしよりねばり強い」また「豊辺は北越人じゃ」と言つたという。豊辺聯隊長は新潟県出身である。戦後秋山將軍は「あのとき沈旦堡には一兵も残つていなくなるやうと何度も思つた」と述懐している。

平素愚鈍の評さえあつた豊辺聯隊長を秋山將軍は最も信頼していたものと思ふ。才氣煥発型指揮官では守り通せなかつたかも知れない。

秋山好古將軍も之また典型的な軍隊指揮官であつた。沙河対陣中零下20度に及ぶ酷寒の候、汚い支那家屋の中でアンペラの上にあぐらをかき、螢火のような火鉢に手をかざし、終日地図を眺めていたという。水筒につめた支那酒を茶碗に注いで飲み、地図を見ては40kmに及ぶ正面を僅少な兵力で如何にして掩護すべきか策を練つていた。

此の頃外国觀戰武官が視察に来た。總司令部では余り兵力薄弱な正面は見

犠牲と4日の日時を費やしたのである。

立見中将

この人は騎兵ではないが、この会戦を語るにあたって欠くことはできない。

立見中将が第8師団長になったのは明治30年であった。

出征まで7年余りも師団長を勤め、その威徳は弘前師団管内に遍ねく知れ渡っていた。大本营の作戦計画では第8師団をウスリー作戦に充てるため、当初内地に控置してあったので、満洲に出征したのは沙河会戦後であり、現役13個師団のうち最も遅れて戦場に到着した。そして緒戦が黒溝台会戦であった。

満洲軍の総予備として中央後にあった第8師団が、25日正午直ちに出発し黒溝台方面の敵を攻撃すべしという命令を受けた。

立見尚文このとき60歳、現役中将の最年長者であった。戊辰戦争賊軍生残りこの老將軍は、外とうの襟を立てて帽子を目深にかぶり、ひげに凍りつ

立見尚文

く息をはらいながら黒溝台に向い急進した。先に述べたように黒溝台を一時放棄し更にこれを攻撃したのである

が、続々と増加する敵のために逆に包囲され攻撃は一向に進捗しない。総軍命令により新たに第5師団が増援され

ると聞き、立見師団長は師団指揮所にあてられた古城子の民家において「これほどの恥辱があるか」と口惜しがった。27日彼我の兵力比からみても

攻撃できる状況ではなかったが、立見師団長は黒溝台に向い飽くまで攻撃しようとした。勿論敵が10個師団もこの

正面に指向していることは、総司令部においても第8師団においても知らなかったが、我よりも著しく優勢である

ことは判っていたのである。それを増援を受けることを恥とし、目標に向い遮二無二に攻撃しようとした立見師団

長の氣迫が、ねばり強い東北健児をふるい立たせた。

立見師団長は27日夜各隊の命令受領者を集め「我が師団は既に2回も他師団の増援を受けるに到ったことは真に遺憾である。我が師団が他師団にひけを取るまいと思えば、この一戦に他師団が五、六度受けた損害を一度に出す

みつけたため乗っていた支那長持の蓋が破れてしまったという。

戦後になって露西亜の資料により敵兵力は10個師団であったことを知り、「敵の兵力は予想以上に大きいとは思ったが、これほどとは知らなかった。俺はまあよいとしても秋山はあるとき

どんな顔をして防いだのだろう」と信じられないように人に語つたという。

立見將軍は桑名の藩士、鳥羽伏見の戦に破れた後、越後更に会津において幕府方について戦つた。明治維新後、

軍人を志したが、嘗て賊軍であったため容れられず司法官となった。

明治10年西南の役の際、初めて軍人となることができたが、薩長の出身でないため、中央に勤務することなく、

指揮官あるいは、部隊の参謀として異色ある存在を示した。

明治の將軍は、たとえ文官から転じた人でも若い頃から武士としての修練を積んでいたため、何んらひけを取ることにはなかった。一方、政治家も武士の出であったため、軍事に關し一見識を持っていた。現在の如く一夜にして

元帥が生れるような有様は国家のため寒心に堪えないところである

立見將軍は詩操に富み黒溝台会戦後次の詩を賦した。

黒溝台之戦
胡兵十万蔽平原

一死素期答聖恩
黒溝台辺三日戦
遍攘渾左岸虜魂
黒鳩が蜂にされて逃にけり
もはやこんかと立見けるかな
黒鳩は敵將クロバトキン、蜂は8師団、こんかは渾河の意味である。

さきにも述べた通り黒溝台会戦は、日露戦争中で最も危険な一歩誤れば攻守廻を変え戦勢全く逆転するおそれのある会戦であった。零下20度の吹雪を冒して戦つた將兵の奮闘もさることながら、卓越した統帥がこの危機を救つたものと言えよう。

本会戦に参加したわが兵力五万四千、死傷九千三百、露軍の兵力約十万五千、死傷一万二千、捕虜四百二十。今を去る一世の昔になる。

習志野陸軍墓地 豊辺大佐が凱旋後建てたと
いう沈旦堡戦死と刻まれたものが多い